

家族関係学は、「家庭を中心とした人間の生活の学」である家政学の、ヒトとヒトとの相互作用に焦点を結んだ学問であることをまず語ろう。「人間の生命維持機構としての家庭」と家族についても語ろう。ヒトは他の生物と異なり、種の保存と個の保存の同時的成立を必要とするココロを持った特殊な生物であることを踏まえながら。生活は生存に支えられ、生存は生命に支えられることも語り、生命の尊厳こそ家政学、家族関係の大前提であることを若者の胸に届けよう。瑞々しい自尊感情が育まれることを願って。

家庭経営学では、家政学の学問体系を示しつつヒトとモノとの総合的な相互作用について示そう。「持続可能」な生活を意識的に探っていくような、問題解決的な生活主体への可能性を込めながら。

家庭科教育法では、家庭科と広く深く共有する家政学の価値観について、適切な家庭科教材を用いて伝えたい。家庭科に対する誇りと愛着に繋がるような価値観について。

このようにして家政学原論の精神を伝えることが、学生の「食について学ぶことへの意欲」に繋がらなくては、その意味も乏しいことになる。難解な生化学、解剖生理学等の専門科目を乗り切る上で心の支えを家政学原論の精神が担えたら、と願っている。「科学を生活化」するために。

持続可能な社会のための家政学の展開

大 藪 千 穂 (岐阜大学)

家政学原論部会30周年記念特別号(1998)の「私の研究と家政学原論」で、「持続可能な社会のための家政学」と題し、大熊信行の家政学とその限界、「人間社会システム」論による新たな家政学の構築を論じた。今回は、その後の10年間に進めてきた、「持続可能な社会のための家政学」の展開をアーミッシュシステムから論考したい。

「人間社会システム」は、様々な有機的関係を持った大・中・小規模のシステムから成り立っている(大藪, 1997)。そして、これらのシステムが持続可能であるための必要条件として、エネルギーや情報の代謝、システム間の相互作用、システムの自律性の3つを提案してきた。(大藪・杉原, 1998)。しかし、現実の社会や国家で、これらの条件がそれぞれのライフスタイルにどのような影響を与えているかを明らかにすることは困難である。このような中、アーミッシュは、世界の中の先進国であるアメリカに居住していながら、エネルギーや情報をコントロールし、独自のライフスタイルを維持しているため、システムにおける代謝、関係性、自律性とライフスタイルの関係が明確なシステムである(Sugihara and Oyabu, 1996, 1997)。われわれは、アーミッシュというシステムを取り上げながら、持続可能な社会のための家政学の理論を展開してきた。

1. アーミッシュのライフスタイル

アーミッシュとは、アメリカとカナダのオンタリオ州で、近代文明を拒否したライフスタイルを200年以上も続けている、キリスト教プロテスタントの小会派の人々をさす(クレイビル, 1996)。彼らは、宗教的信念のもと、独自のライフスタイルを維持している。自動車を持たない、電話を家では使用しない、電気を引かない、8年制の学校教育、農業を主とした生活、独自の衣服コード、バギー(馬車)の利用、口伝えの生活のルール集であるオールドヌング、オールドヌングを破った場合のシャニングの制度など、外からは奇異に思えるような様々な決まりに基づいた生活を送っている。

アーミッシュの歴史は、1525年に宗教改革によって発生したアナバプティスト(再洗礼派)に遡る。再洗礼は、幼児洗礼を否定するとして、迫害を受け、彼らはアルザス地方の山岳地帯に逃れた。その

中で、1693年にジェイコブ・アンマンによって分離した一派を、アンマン派という意味でアーミッシュ (Amish) と呼んでいる。その後、約3000人がアメリカへ移住し、現在、ヨーロッパにアーミッシュは居住しておらず、アメリカ22州とカナダのオンタリオ州に12.5万人以上が住んでいる。

2. アーミッシュのシステムと持続可能性

では、システムが持続可能であるための3つの必要条件を、アーミッシュシステムから考察し、持続可能な社会のあり方を考えてみたい。まず、経済、エネルギー、情報の代謝についてみてみよう。アーミッシュの経済活動については、ニューディール政策時 (1935-36年) に実施された調査しかないが、当時のアメリカ人農家とアーミッシュ農家を比較すると、アーミッシュ農家の方が収入も支出も大きく、活発な経済活動を行っていた (杉原, 2001)。その後、アメリカ人の家庭では、収入も支出も大きく増加したため、大恐慌時代から、経済活動が大きく変化したといえる。この傾向はわが国においても同じである。エネルギー消費量の変化についても同様で、アメリカのエネルギー消費量をみると、1930年代から、特に石油の消費が増加した。また、伸び率では、民生用のエネルギー消費の増加率が特に大きくなった。これらは、ライフスタイルの変化がもたらした変化といえよう。一方、アーミッシュは、電気や自動車を用いないライフスタイルを維持しているため、1930年代と比べて、エネルギー消費量はほとんど変わらない。経済、エネルギーの代謝に大きな変化はなく、小さいままで維持してきたのである。さらに、情報のやりとりについてみると、わが国の発信情報量は、1985年を100とすると3倍近くまで増加している。しかし、それらの発信情報をすべて消化できているわけではない。総供給情報量のうち、1996年度は6.0%しか消費されていない (杉原, 2001)。一方、アーミッシュは情報の量と質をコントロールしている。近代社会が主としている情報源であるインターネットやテレビは利用しない。情報源は、コミュニティ内でのコミュニケーション、8年制の教育、アーミッシュ内の新聞や情報誌に限られている。これらからも、アーミッシュは、エネルギーやモノだけでなく、情報もコントロールし、それぞれの代謝が小さく、環境に負担の少ないライフスタイルを実践していることがわかる。

次にシステムの関係性について考えたい。現代社会には、個人、家庭などの小規模システム、地域社会や企業などの中規模システム、そして国や国家連合体、地球などの大規模システムまで、多種多様なシステムがあり、それぞれが相互に関係している。しかし近年、家や地域社会の機能は低下しており、同時にシステム間の関係性が薄れている。このような中、インターネットの出現により、空間的境界を越えて、個人が地球規模での結びつきを始めており、新たな社会システムが無数に誕生している。しかし、それらのシステム間の関係性についてはまだ明らかではない。一方、アーミッシュ社会は、現在でもイエを基盤としている。今でもイエが生産、消費、教育など、すべての生活の中心となっている。そしてイエの次に教区を中心としたコミュニティが大きな役割を担っている。平均20家族、約163人が一つのコミュニティを形成している (クレイビル, 1996)。コミュニティは相互扶助の役割を担っており、その規模が小さく保持されていることが特徴的である。アーミッシュ社会はイエとコミュニティという、小さなシステムの中で、ほとんどの生産と消費が完結し、互いに強い関係をもっている。

最後に、システムの自律性についてみておこう。自律性には、自己調節機能と自己組織性があげられる (杉原, 2001)。自己調節機能とは、システムが環境の小さな変化に対応してシステムの自己維持をすることである。代謝はこの自己調節機能によってなされている。一方、自己組織性とは、自己調節機能で対処できる小さな変化ではなく、環境のより大きな変化に対するシステムの対応機構をいう。アーミッシュにおける自律性は、ライフスタイルの自己決定、自己管理、システムの防御機構と維持機構にある。アーミッシュのライフスタイルは、成人時の再洗礼によって規定される。再洗礼を受け

ることによって、アーミッシュとなるが、再洗礼後はアーミッシュとしてオールドヌング（口伝のルール集）で決められたライフスタイルを実践しなければならない。また、新たなライフスタイルの変化に対しては、自分達でアーミッシュとしてのアイデンティティを失わない範囲で自己管理、自己決定している。オールドヌングに違反した場合は、シャニングという社会的忌避制度としてのシステムの防御機構（社会的制裁）が働く。ただし、悔い改めればシャニングが解かれることになっている。また、システムの維持機構としては、再生可能なエネルギーの利用による農業を中心とした経済活動が基本となっている。一方、現代社会の防御機構は社会的規範を法律として成文化し、それに違反した場合は罰則や刑務所での服役など、経済的、肉体的制裁機構が存在する。この場合、アーミッシュのシャニングとの違いは、悔い改めなくとも罰則が軽減、あるいは服役が終了することである。さらに維持機構としては、非再生エネルギーによる工業生産を中心とした経済活動が基本となっている。

以上、「人間社会システム論」から、持続可能な社会のための3つの必要条件を導き出し、それらの意味を、アーミッシュシステムと現代社会の対比から明らかにした。この結果、アーミッシュシステムは、持続可能な社会のために必要な3条件を持っており、システム間の小さな代謝、強いシステムの関係性、そして確固としたシステムの自律性を兼ね備えていることが明らかとなった。今後、われわれ現代社会が持続可能であるためには、アーミッシュシステムから学ぶべき点は多い。

「人間社会システム」のあり方には、「環境」、「情報」、「ライフスタイル」が大きな影響を与えている。それらの役割と働きがどのようなものであるかを明らかにし、「環境」、「情報」、「ライフスタイル」の相互関係、システム全体が持続可能であるための三者のあり方、そして「人間社会システム」における家庭の役割を解明することが、持続可能な社会のための家政学における根本課題である。そして、持続可能な社会のためにその知見をどのように活用していくかを考えることによって、新たな家政学の方法論を見出すことができる（Sugihara and Oyabu, 1996）。アーミッシュのライフスタイルを分析し、現代社会と比較検討し、持続可能な社会のためのライフスタイルを明らかにすることは、まさに、持続可能な社会のための家政学の展開を意味すると考えられる。

参考文献

- 大藪千穂（1997）家政学から人間社会システム学へ，原論報，**31**，31-34
 大藪千穂・杉原利治（1998）持続可能な社会のための家政学，原論報，**32**，44-46
 Toshiharu Sugihara and Chiho Oyabu, (1996) New Strategies for Sustainable Society. I. The Role of Environment, Information and Lifestyle in Socio-organic Systems, *J. ARAHE*, **3**, 41-46
 Toshiharu Sugihara and Chiho Oyabu, (1997) New Strategies for Sustainable Society. II. The Perspectives of an Alternative Lifestyle in Well-developed Countries through Amish Way of Life, *J. ARAHE*, **4**, 85-93
 杉原利治（2001）21世紀の情報とライフスタイルー環境ファシズムを超えてー，論創社
 ドナルド・B・クレイビル，杉原利治・大藪千穂訳（1996）アーミッシュの謎，論創社